

1.14. ウィーン便り (追)——「ぼんぼん」に載せきれなかった話 ——

「ぼんぼん」に載せきれなかった「公」「私」のエピソードあれこれを順不同で補足する。

・「日立」と言う名前

こちらの人にはなじみが薄い、というのが残念ながら実感である。職場の原子力屋が「原子力メーカの一つ」と知っているのは当然だが、一般の人はそうはいかない。電気製品の会社とまで知っている人も東芝に比較するとかなり少ない。むきになる気はないが少々寂しくもある。

海水淡水化に原子力を利用しようとして、仕事の上で一緒になったある開発途上国のプロジェクトマネージャーに「BWR メーカには日立もある」と紹介した。「日立の名は知っているが、東芝の一部だろう」との反応には正直落胆した。

家主のおじいさんの場合は愛嬌で許せる。入居直後、拙いドイツ語で自己紹介をした。「名前はトシオか、わかり易くていい。トシバのトシだな」。

・ピロリ菌 (1996年5月)

以前から胃潰瘍で悩んでいた。私のアキレス腱で、ストレスがたまると胃にきた。親父の系統だからいつかは手術、と覚悟していた。二十年近く毎年胃カメラで検査を受けていた。おかげで(?)胃カメラを呑むコツに熟練し、研修医の教材になったこともある。環境の変化か、ウィーンに来て半年で胃カメラのお世話になった。が、日本より楽だった。五分余りで終わり、病理検査用の切片も採取された。「ピロリ菌退治の処方を出す」と女医さん。初耳の言葉だ。医者資格の日本人職員によると「ピロリ菌の存在は日本でも知られているが、問題視していない」と言う。二週間後再度の胃カメラ検査で「ピロリ菌は退治できた」との診断。嬉しいことにそれ以来、胃カメラとは付き合わずに済んでいる。

余談だが、翌年の日本一時帰国で成人検診を受けた。問診の医者が愛嬌だった。ウィーンの診断書を持参すると「これドイツ語で書いてあるんでしょ、読まなきゃいけませんか、向こうの医者が良いと言うのならそれで良いでしょう」と内容を読む素振りも見せず「総合判定B」に丸をつけてくれた。

・ドイツ語教室の試験

最初の試験は申し込み時の「クラス分けテスト」。スキー教室に入ると最初に坂道を滑らせてクラス分けをする、あれである。「大学で二年勉強した、全くの素人ではないはずだ、初級の上の二級くらいから始めたい」と願った。一週後、電話で結果の連絡があった。ドイツ語での電話である。何度聞いても聞き取れない。相手も諦めて英語で「四級だ」と言う。「四級?」と我が耳を疑った。

が、事実だった。びっくりしたがそんな訳でとにかくクラスが始まった。クラスは週三回、昼休みに各回五十分である。期待通り、文法は結構良い。読み書きも何とか着いて行ける。「喋る」のもまあ何とかポツポツと。問題は「聞き」。正直に駄目である。六年経った今では、人との会話は少しは分かる。が、テープから聞く教材や、ラジオのニュースは殆ど分らない。クラスではいつも劣等生である。

期末にテストがある。「文法」「語彙」「読み」「書き」「聞き」と「喋り」である。「喋り」以外は答案に答えを書く。苦勞していると、先生が覗きに来て指差しながら囁く。「これは? (答えが違うよ)」「これはaではなくbでしょ」などと、嵩上げて合格点に到達させてくれる¹。勿論、本来はいけないことだが、「不合格にしたら勉強意欲を断つだけ、合格させる方が勉強する」と心理を読んでいる。おかげで

¹ 誰にでもと言う訳ではないようだ。出席点があって日頃の学習態度の良い生徒が対象らしい。2001年の

合格ラインの65点を僅かに越える「やっこさ」で七級まで進級した。もう上が無い。一所懸命ついで行くだけである。宿題も出る。そのための時間もばかにならない。「なぜ？」と時に自問する。でも続けている。好きなんだろう、要するに。

・グルジアマフィア：ウィーン地下鉄車内で拘りに会う（2002年11月）

近頃ウィーンも安心できないとは聞いていた。が、自分に起きるとは思わなかった。油断だった。ある日いつもより少し早めに帰途に就いた。ラッシュアワーで、珍しく電車は混んでいたが気にせず乗り込んだ。資料の立ち読みも出来ないほどの混雑に五分余り耐えて乗り換えた。あとは普通に帰宅して、背のリュックのポケットが空なのに気付く。携帯電話、カードケースの中のクレジットカード二枚、銀行のキャッシュカード二枚、現金少々その他に、市内交通の年間定期券、国鉄の優待券等がなくなっていた。会社の事務所に忘れたのかと、翌朝早目に出勤したがやはりない。早速銀行や警察に届け出た。混雑の中でリュックのポケットから抜き取ったとしか考えられない。周囲の視線を遮るために少なくとも三人組に違いない。この後、自分でやることの仮想実験でそう確信する。確かにあの時周囲は大柄の男が多かった。

幸い(?)と言うか、カード類での実被害は結果的にはなかった。災難が夕方だったのでクレジットカードを悪用する時間がなかったのだろう。キャッシュカードは一日の引き出し限度額の約50000円までは覚悟したが無害だった。周りの職員に話したら誰しもが大なり小なり似た事例に遭っている。

二週後に届いた携帯電話請求書で被害を知ることになった。約30000円の「国際電話料」である。多少の心配はしていたが届けるまでの一晩の間に使ったらしい。被害は諦めるにも、通話先に興味がわいて追加料金覚悟で電話会社に調査を依頼した。入手した通話実績書には、盗難直後の夕方から回線を止めた翌朝まで深夜の数時間を除いてグルジアの数個の番号に掛け捲った三ページ近いリストがあった。

(余談) 警察の事務処理。「拘られた」と確信して最寄りの警察に昼前に届けた。調書を作って「書類は明朝取りに来い」と言う。翌朝指定の時間に出向くと「まだ出来ていない、午後出直せ」と言う。さて出直して驚いた。今度は「最近規則が変わって事故証明は届け出署ではなく事故現場の署で出す、今回は乗車駅か降車駅の管轄署になる、調書はそこへファックスしてあるから『どちらの署にあるか自分で調べて行け、電話番号はこれこれ』」。しかも、「国際都市」の警察で英語がままならない。私事ではあるが秘書のウィーン子に助けを求めた。ビュロクラシーは国連だけではないのだ。ウィーンの良さは、多少の手間と手数料は掛っても市内交通の年間定期券、国鉄の優待券を窓口で即座に再交付してくれることである。

・親友訃報（1996年9月）

秋の年次総会最終日、私は総会会場で事務局長の統括報告を聞いていた。顔見知りの原研ウィーン事務所長が私の席へ「訃報です」と封筒を届けてくれた。事務局長の声が耳に入らなくなり会場を出た。大学の同級生で「原子力工学科一期生」の中でも最年少の核データ屋だった。良い奴だった。こんな形で彼がウィーンへ来るとは予想していなかった。

前年夏、私のIAEA赴任を前に勝田で飲み会を企画してくれた。まさかそれが彼との最後だったとは、と驚いた。「来春はウィーンへ出張予定、その時會おう」とその時楽しげに言っていた。そして春、「なぜ来ないのだろう」といぶかっていると夏先に「入院中」との知らせが来たのだった。共通の知り合いである家内が夏休み後の帰国時に見舞った。「望み薄」と看護婦らしい冷徹な印象を伝えてきた。それから一ヶ月半後の訃報だった。膵臓癌だった。天真爛漫な奴だった。天動説的に自分中心の面も会ったが憎めな

七級のテストではその応援でも落第。追試で「やっこさ」パスした。

い奴だった。人を憎むことの出来ない奴だった。

二週後、トーストマスターズクラブで弔辞を述べた。「法然幼少時の『復讐の連鎖断ち切り』逸話」に彼の純真さをなぞらえながら自分の声にむせんだ。個人名は伏せたが、核データ研究部門の仲間が「**のことか」と後刻問い掛けてきた。共通の知人だと知った。翌春一時帰国で霊前に線香を上げて漸く彼への別れができたと思った。この弔辞は五回忌にドイツ語でもやった。初のドイツ語スピーチだった。

・「母逝く」(1999年5月)

報を受けたのは公務で韓国に入った翌日の日曜だった。会議準備のため前日に訪ねた韓国原研のパソコンにそれを伝える日本の家内からのEメールが飛び込んだ。八十九歳だった。その年の始め帰国の際、入院中の病院に訪ねた時母は既に私を認識してくれなかった。看護婦さんから「息子さんですよ」と言われて、しばらく私の顔を見詰めた後「違うでしょ」と言われて寂しかったが、「哀れ」と言う気持ちと共に、「これで苦しまなくて済むのかも」と言う気持ちが入り混じっていた。戦後朝鮮から引き揚げてきて、四人の子供を健康に育ててくれた母。自分が単身で自炊生活をする段になって良く分った、というより感嘆した。「あれだけ空腹の子供を抱えて、電気釜も冷蔵庫もなく、貰い水をする環境で、三食よく食わせてくれたもんだ、しかも教職で自分の生徒の面倒も見て、自分自身はちゃんと食べていたのだろうか」と認識するまでに五十年要したように思う。引き揚げて来た道を逆に辿って、元気なうちに私の生まれた北朝鮮の土地へ陸路で連れて行きたいとの願いは実現しなかった。合掌。

・「ふけ」と「はげ」(2000年秋)

最初に始まったのは八月だったか。その月始め、モンテローザ登山(第五編、こぼれ話編)の山小屋でシャワーなしの一夜を過ごした頃から頭が痒くなってきた。因果関係はないのだろうが不思議に時期が一致している。月末の、二度目のモンテローザのあとで度が進んだようにも思う。あの時もシャワーなしの夜があった。シャンプーを変えても効果がない。十月に訪ねた医者の方もきかない。まるで吹雪並みの「ふけ」だ。頭髪も抜けてくる。明らかに上部の風通しが良くなっている。放射線障害による脱毛のようだ。頭皮がピンクに変色している。床屋での感染可能性も疑った。栄養バランスが関係するのか、ホルモンでも刺激したか、水そのものに原因があり得るのか、とありそうにないことまで考えてしまう。時に眠れないほど痒い。シャワーで洗髪しても朝までもたずに痒さで目覚める。「みだれ髪」の替え歌ができた。

髪の薄さに手をやれば若き黒髪思い出す

昔恋しや床屋は月一

今は三月(ミツキ)でまだ足りぬとは

恋もできないああ寂しいな

翌年一月、観念して別の医者を訪ねた。この処方効いた。十日ほどでほとんど正常に戻ってほっとした。が、なくなった毛は戻らない。「どう見ても四十代、定年なんて嘘だろう」とハイク仲間にもはやされても現実な現実。もっともこちらでは「はげと年齢」の相関は殆どない。現役のプロサッカーにもはげた選手がいるのだから。

・「ふけ」と「はげ」その二(2002年春) 実は抗マラリア剤被害

一月半ばだったか、再発したのは。その直前の年末年始にキリマンジャロ登山でタンザニアに出かけた。「アフリカの屋根」と称される高山である。技術的難度への不安は薄かったが、山行計画への参加を決心するのに最も迷ったのが高度順応のために少しずつ高度を上げる「六日間シャワーなしのテント泊り」だ

った。前年モンテローザ後のいやな思いがあったからである。無事に帰ってきた、と思ってから旬日で「ふけ」再発である。やはりやられたか、と憂鬱になった。前回利いたシャンプーも効かずに二月になった。

二月末の週末、ハイキングクラブで泊りがけの旅に出た。その朝食時、親しい仲間が「マラリア錠剤で副作用」と口にした。思い起こすと前回は春にインドへの出張で抗マラリア剤を飲んでいる。今回はタンザニアのために飲んでいる。服用時とふけ発生時の時間差に違いはあるが「ひょっとしてその副作用か」と思い当たった。たまたまその日は、一週後に迫ったパキスタン出張に備えての服用開始日だったがその気になれなかった。翌日ナースに相談してから、と服用を見送った。

翌月曜、そのナース「副作用は有り得る、パキスタン用に別の薬を処方する、皮膚科医に会え」と言う。「一ヶ月前にこの状態だったらパキスタン出張は辞退したのに」と思いながら翌日皮膚科医を訪ねた。診断は意外だった。「抗マラリア剤は無関係、暑くて陽光一杯のタンザニアから真冬のウィーンに戻った天候激変が原因、一昨年は雪山登山直後でその逆、来週パキスタンなら日光豊富だから却って好転する可能性もある」と言う。半信半疑だが、それが私の体質だろうと医者と言うなら今日のところは信じて、と処方箋を受け取って帰宅。ナースに報告すると彼女も首を傾げている。

出張前日に「蚊の予防に注意すれば大丈夫、自分も抗マラリア剤被害経験がある」とマレーシア出身者に聞いて心が決まった。抗マラリア剤はリスク覚悟で服用量を勝手に半減することにした。パキスタンはその頃「世界テロ不安」の中で気の進まない出張だった。旅行中、テロ不安と抗マラリア剤副作用への不安が付きまとった。とにかく無事に帰郷したが、頭の痒みが去るまで約三ヶ月要した。ナースに聞いた病名を「脂漏性湿疹」と家内が調べてくれた。服用と発症に時間差があるのは、タンザニア用の抗マラリア剤がより強力だからだろう、とナースが言っていた。抗マラリア剤はもう飲みたくない。

・居候失神事件（2001年初春）

なべて男の寡暮らしだったから客は皆無だった。その我が家の初の居候は「中年の女二人連れ」だった。が、ロマンチックとはいかなかった。到着の翌朝、二人とも眠っているので勝手に朝食を済ませて出勤して間もなく、その一人から会社に悲壮な電話があった。「**が風呂場で倒れて意識がない、救急車を頼んだ」と言う。シャワー室に入ってから「不思議に遅い」と気になり扉を開けて発見するまで三十分余りあったと言う。意識がないと聞いて最悪の状態が頭をよぎる。

車で駆けつけると救急医が応急診察中。風呂場のタイルの上にシートにくるまれてぐったりしている。倒れた時に頭部をぶつたらしく、これでは動かせない。「痛みはない」と本人は顔で反応するが信用できない。痛みすら感じないのかも知れない。十時半、救急車に収容して病院へ急ぐ。とりあえず命は大丈夫らしい。午後、「頭部CTで小さな影が見える、明朝再検査」と今夜は病院泊りの指示が出た。幸い日本の家族とは連絡が取れた。不安な夜を過ごす。翌日日中は検査続きで本人にも会えずに時間が過ぎていく。死にはしないらしいことだけが安心させる。夕方、倒れた本人から待っていた電話が来る。「最終検査結果は未だだが退院して良いそうだ」と言う。聞き違えるほど声に張りがあるのは、「大丈夫」と医者に言われたからだろう。「とにかく良かった」と三人で安堵の夕食。異国での緊急入院騒ぎの二日間、住人としての生活感覚が役立てたとすれば嬉しいが、二度とあって欲しくない経験ではある。

・家主のおじいさんと家族

私の住んでいる部屋のある建物は起源が十三世紀かという古い建物の一角にある。歴代日本人の借家人が多い。金払いが良いのと清潔に使うのを歓迎するからだろう。家主のじい様はやさしくて気さくな元警察官。器用な人で車や旅行カバンの簡単な修理など気軽にやってくれる。その家主のじい様、屋内で上履

きに履き替える習慣だけは未だに馴染めないらしい。入居当時、「家の中へは『靴』で入らない」よう頼んだら、「分った」と言って外履きの「サンダル」で入ってきた。再度その意味を説明したら、次回は玄関の数分前で脱いで素足で地面を歩いてきた。一人娘がアフリカ旅行中に病に罹りあつという間に亡くなったと言う。二人の男児を残した。今は二十代の好青年である。ひとりは合気道をやっている。その孫は離れの小さな部屋をもらって、ガールフレンドと一緒に出入りしている。

2002年6月始め、そのじい様の連れ合いのばあ様が逝った。七十歳後半だった。幼い頃に患ったポリオの所為で立ち居振舞いに多少不自由はあるものの、地元の歴史や地理を話して呉れる生き字引のような好々婆だった。彼女のドイツ語が聞き取れないのが残念だった。日頃は家から出ない彼女と土曜の朝には腕を組んで、近くのスーパーへ買物に出掛けるじい様だった。残されたそのじい様の落胆振りを目にして、連れ合いを失う悲しさを初めて自分の年代として感じたように思った。その場にふさわしいドイツ語が出てこなかった。が、気持ちは通じたようだ。その言葉。

(am 5.6.2002) Liebe Oma, Du hast uns leider ploetzlich verlassen und wir hatten kaum genug Zeit fuer schoene Stunden. Ruhe in Frieden und beobachate uns vom Himmel. In Trauer, T.

・花粉症

ウィーンに来て杉花粉症から解放されている。ウィーンの春が楽しめるのもそのお陰である。春に日本に帰国すると悩まされるだけにそのありがたさを実感する。かつて二月後半に海外出張したことがある。成田からの戻りタクシーの中で頭が重くなった。何故と訝ったが花粉だった。いはば海外は温室のように花粉から隔離されていたのだ。出張中に日本では花粉全開になっていたのだ。温室から出て一時間で重傷の花粉症が再開したという訳である。

前置きが長くなった。ウィーンには花粉症はないのだと最近まで思っていた。森にも杉は少ないし、あっても種類が違うからだろうくらいに考えていた。ところが滞奥七年目の今年(2002年)夏先から症状が出てきた。日本での時ほど凄まじくはないが、くしゃみ、鼻水、眼のこそばゆさは身に覚えがある。そう言えば春先の新聞に「注意事項と予防法」なる記事があった。記事が出たのは四月始めだから日本よりかなり遅い。気温が低いからか、あるいは杉以外の花粉だからか。

花粉症を思うと帰国が憂鬱になる。定年後は春先のその期間、日本を脱出しシーズン後に帰国するパターンにするかと考えたりする。

・オランダペテン、「歓迎」と「事件」(2000年9月)

ペテンは首都アムステルダムの北、列車で三〇分ほどの海沿いにある。かつては日本からの留学生もいた原子力研究所がある。そこでの国際会議に参加した。初日朝、研究所入り口で「歓迎」された。「反核」グループにバスが入門を阻止されたのである。バスの下に一人がライインし、車は動けない。主催者側が「体を張って」車を通そうとするが駄目。車内からの「トイレ」緊急アピールも、「車内にある」と冷たく拒否。膠着すること小一時間、理由不明のまま入門阻止が解けた。前方降車口をあれほど強固に阻止していたのに、後方降車口から降りるわれわれに何の抵抗もなかった。交渉が成り立ったのか、デモ隊員にも「出勤都合」があったのか。メディアの取材が済めば目的は達成できたのか。

・「探検家の死」(2001年5月)

日本の極地探検家が北極海で消息を絶った、との報道が眼に入った。単独行で故郷の松山までの極地旅行の途中だったと言う。先ず合掌。私自身の「死に場所」のイメージが蘇ってきた。この人、**さんは

どんな気持ちの最期だったろうと思わざるを得ない。「幸せだったかも知れない」と言ったら響きを買うだろうか。が、そうかも知れないと思う。もちろん100%ではないだろうが、50%以上はそうではなかったかと思う。自分をその立場に置いて見てそう思う。

人はどんな時に自分の「死」をイメージするのだろうか。今では自分でも理由を思い起こせないが、少年時代に「自殺願望」を持った時期があったように思う。が、それは気付くと消えていた。中年になってあらためて「死」を考えた時があった。挫折し、ストレスに押しつぶされそうになった時期だった。山を彷徨した時もあった。仏教関連の本を読み漁った。いろいろな人の助けで最後まで行かずに済んだ。乗り越えた時、「生かされている」と言う言葉が理解できた、と思った。

不思議なことに、「幸せだなあ」と感じ得る時にも「死」をイメージすることを知った。これは私だけか。挫折から呼び戻されて、生きる力を与えられて、ウィーンでの国連生活中にその感を持った。公私にわたる日々の生活に充実感を持って、旧知の友を振り返って、「これ以上に幸せな時期はあるまい」と思うと、「今、幸せなうちに死んでも良い」とすら思った²。

探検家の最期の心理は分らない。自分がその場にあつたら、と想像する。自分には「疲労凍死」のイメージがあつた。「これは楽だろうな」との感があつた。雪山登山の途中で、飢えと疲れで意識がぼんやりとする「臨死体験」の経験は既にあつた³から、好きな山でならそれが自分の最期の形であっても良い、と思つていた。そこに「極地探検家の死」である。「幸せだったかも知れない」と思う所以である。

・畳生活

趣味の「書」を続けたいために畳二枚を持ってきた。この畳は居間の一週に置いてある。これが「書」以外にも役立っている。初入院生活で腰痛になったあと、「居候」に寝室を提供した時の避難先などである。ベッドより寝心地は断然良い。この冬、腰の不調と寒さでこの畳に逃げ込んだら離れられなくなった。実に快適である。「書」を実践するための座卓、文房四宝が困んでいる。この居間、独り者生活では食堂、仕事場、朝の体操場、夕方のパーティ会場と八面六臂の稼働率である。そこに寝間の機能も加わつた。学生時代の「四畳半生活」である。ここに居れば酒もある、カラオケもある、演歌も聞ける、必要ならパソコンもある。狭い空間で落ち着くとは、いかにも日本人だなと苦笑する。

余談だが、外国生活から帰国に際しては不要品の処理がついて廻るのは誰しも共通である。この畳もそのリストに含める予定ではいた。これには間違いなく買い手があるだろう、とは思つてはいた。が、売り出すはるか以前に「予約」が入つた。畳の存在を知つた永住の先輩からである。やはり畳は良い。

² マドリッド首絞められ事件 ([詳細編](#)) はこんな時期だった。死の恐怖を感じなかった。

³ 2000年夏、イタリア側からの[モンテローザ登山](#)がその代表。他にも近いのが一、二度ある。